

講演概要

「認知症にどう立ち向かうか」

西村 正樹（研究所理事・医療医学部門主任研究員 / 公立八鹿病院院長、滋賀医科大学名誉教授）

高齢化社会において、認知症の治療や予防を実現することは祈願です。とくに高齢化率が高く、医療リソースが限られる当地域では、認知症対策をどう進めるのかは切実な課題といえます。

認知症の原因で最も多いのはアルツハイマー病ですが、この病気は 20~30 年もの長い期間をかけて脳内に沈着してくるアミロイド β と呼ばれるタンパク質によって引き起こされることが知られています。しかし、脳アミロイド β を減らす治療法の開発は長らく 実を結んでいませんでした。しかしこの数年、アミロイド β に対する抗体が初めての先進的治療薬として臨床の場で処方できることになり、従来の内服薬に比べて進行を遅らせる効果は格段に期待できるようになってきました。認知症を治すあるいは進行を止めるなど十分に満足な治療効果があるとは未だ言えませんが、大きな一歩であることは間違いありません。合わせて、脳アミロイド β 沈着の診断に欠かせない PET-CT 画像検査もようやく当地で実施可能になったことも大きな前進です。

一方で、発症予防に向けた医学的、社会的取り組みも重要性を増しています。これまでの疫学研究から、認知症の危険因子は数多くあることが明らかにされ、そこには喫煙、飲酒、運動不足などの生活習慣や糖尿病、高血圧、難聴、抑うつなど身近な慢性疾患が含まれます。また、近隣コミュニティと疎遠になり、人付き合いも乏しくなる等の社会的孤立が大きな要因になることも明らかにされ、就労や趣味、地域活動への参加が対策として有効であることが強調されてきました。

この講演では、アルツハイマー病研究を専門としてきた立場から、市民の皆様に本疾患に対する理解を促すとともに、最先端医療の現状と展望を解説し、危険因子となる社会的要因への介入の試みを紹介するなど、医学的処方と社会的処方の両面からの認知症対策への取り組みとその有用性について概説しました。